

童蒙手引草

初編上



特42

604

共  
四  
本

052892-001-0

特42-604

童蒙手引草

橋爪 貫一/抄訳

M6

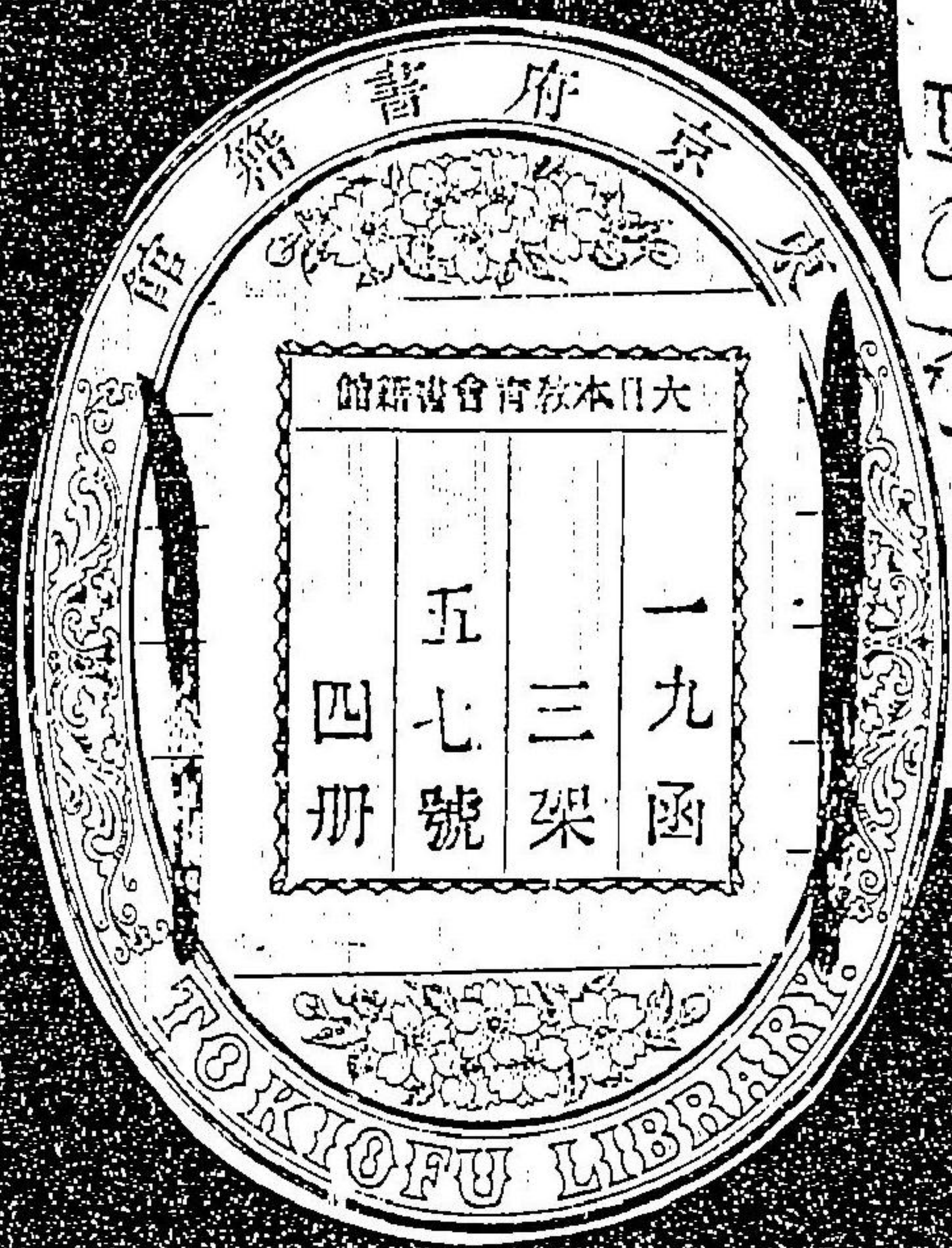
CAA-0216





童蒙手引草

初編上



特 42

604

共 四  
本

四冊



明治六年酉九月

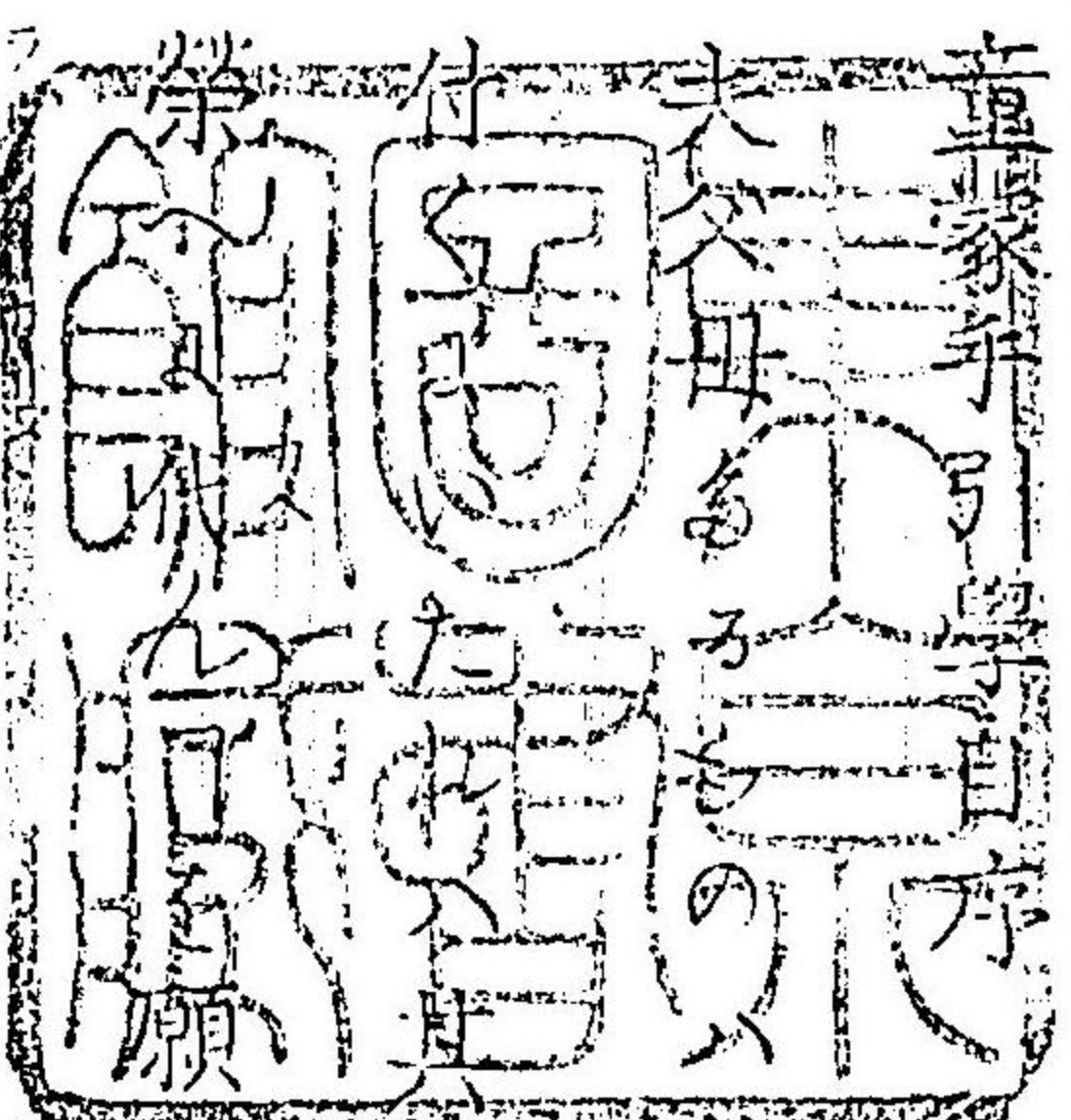
松園先生著

童蒙家範草

全十冊

東京書肆

誠之堂藏



童蒙家範草  
 夫父母者、子の  
 我ガ辛勞を厭て、其子を養育し、その心  
 付届ざる處を教へ導き、後の榮へを己の  
 榮へに願ふものなれば、其教は背く片ハ父母ノ苦  
 勞を重るのこふらむ之を不順なるものといひ、他人ノ忌嫌  
 て、れ終ハ不幸なることぞのこ降と來るよ至不能く注意せ

ばんバちふべからむ今此書は於るや其父母もふもの、教  
 へを些か補ひ助けんや老婆心を以て宇宙間よりふとら  
 ば、此の昂物の元由ハ更ふて地球上善行する人の傳記を擧

東京書肆



明治六年酉九月

松園先生著

# 童蒙子行草

全十冊

東京書肆  
誠之堂藏



我<sup>シ</sup>ガ辛<sup>シ</sup>勞<sup>ロウ</sup>を厭<sup>イ</sup>て其<sup>コ</sup>子<sup>ノ</sup>を養<sup>ヤウ</sup>育<sup>イク</sup>すもの心  
 行<sup>キョウ</sup>届<sup>トキ</sup>ざらば處<sup>トコロ</sup>を教<sup>シ</sup>へ導<sup>ミチ</sup>き後<sup>ノチ</sup>の榮<sup>ハ</sup>へを己<sup>ノ</sup>の  
 榮<sup>ハ</sup>ふものなれば其<sup>コ</sup>教<sup>シ</sup>ふ背<sup>サマ</sup>く其<sup>コ</sup>父母<sup>ノ</sup>も苦<sup>ク</sup>  
 勞<sup>ラウ</sup>を重<sup>オモ</sup>るものよふらむ之<sup>ノ</sup>を不<sup>フ</sup>順<sup>ジュン</sup>なるものといひ他人<sup>ノ</sup>も忌<sup>イ</sup>嫌<sup>ト</sup>  
 され終<sup>ツ</sup>はハ不<sup>フ</sup>幸<sup>コウ</sup>なることぞの降<sup>フ</sup>て來<sup>キ</sup>るも至<sup>ト</sup>ら能<sup>ク</sup>く注<sup>チウ</sup>意<sup>イ</sup>せ  
 さんばらふべからむ今<sup>イマ</sup>此<sup>コノ</sup>書<sup>ヲ</sup>を於<sup>オ</sup>ふや其<sup>コノ</sup>父<sup>ノ</sup>母<sup>ノ</sup>ももの、教  
 へを些<sup>イハ</sup>か補<sup>ホ</sup>ひ助<sup>タ</sup>けんや老<sup>ラウ</sup>婆<sup>ハ</sup>心<sup>シン</sup>を以<sup>テ</sup>て宇<sup>ウ</sup>宙<sup>チュウ</sup>間<sup>ノ</sup>を以<sup>テ</sup>て  
 是<sup>コノ</sup>品<sup>ノ</sup>物<sup>ノ</sup>の元<sup>ノ</sup>由<sup>ヲ</sup>ハ更<sup>ニ</sup>も地球<sup>チキウ</sup>上<sup>ノ</sup>善<sup>ゼン</sup>行<sup>コウ</sup>する人<sup>ノ</sup>の傳<sup>デン</sup>記<sup>キ</sup>を擧<sup>アゲ</sup>



て善を勸<sup>ス</sup>め又悪行をなせし人の傳記をちげて悪をこ<sup>ス</sup>けし  
 専<sup>モツハ</sup>ら童蒙<sup>ドウモウ</sup>開知<sup>カイチ</sup>の摸<sup>テ</sup>範<sup>ホン</sup>となるべき<sup>ハ</sup>洩<sup>モラ</sup>さず諸書<sup>シヨショ</sup>を抄<sup>セウ</sup>譯<sup>ヤク</sup>し  
 世<sup>ヨ</sup>は公<sup>オホヤク</sup>にすふところなれ<sup>ハ</sup>かふらざ<sup>レ</sup>も之<sup>コレ</sup>を讀<sup>ヨ</sup>み之<sup>オコナ</sup>を行<sup>ハ</sup>  
 て、親<sup>セウ</sup>ある者<sup>ヨ</sup>の心意<sup>コノコ</sup>を安ん<sup>ト</sup>ど孝順<sup>セウジュン</sup>なるものと世<sup>セウ</sup>は稱<sup>セウ</sup>譽<sup>ヨ</sup>せ  
 られ我<sup>ワ</sup>心中<sup>コノココロ</sup>もまんぞく<sup>ト</sup>て喜<sup>ヨロコ</sup>ひをま<sup>シ</sup>終<sup>ニ</sup>て人々<sup>タリタリ</sup>に尊<sup>ウヤマ</sup>と敬<sup>ウヤム</sup>  
 する、品行<sup>ギヤウレキヲ</sup>を得<sup>シ</sup>ん<sup>ド</sup>云<sup>フ</sup>爾<sup>ニ</sup>

東京

明治六年第四月

橋爪貫一 誌

童蒙手引草卷之一

目次

卯<sup>ボウ</sup>歎<sup>カン</sup>孫<sup>ソン</sup>の事

紙の事

筆の事

墨の事

石筆の事

石盤の事



海綿の事

黒色額面板の事

筆切小刀の事

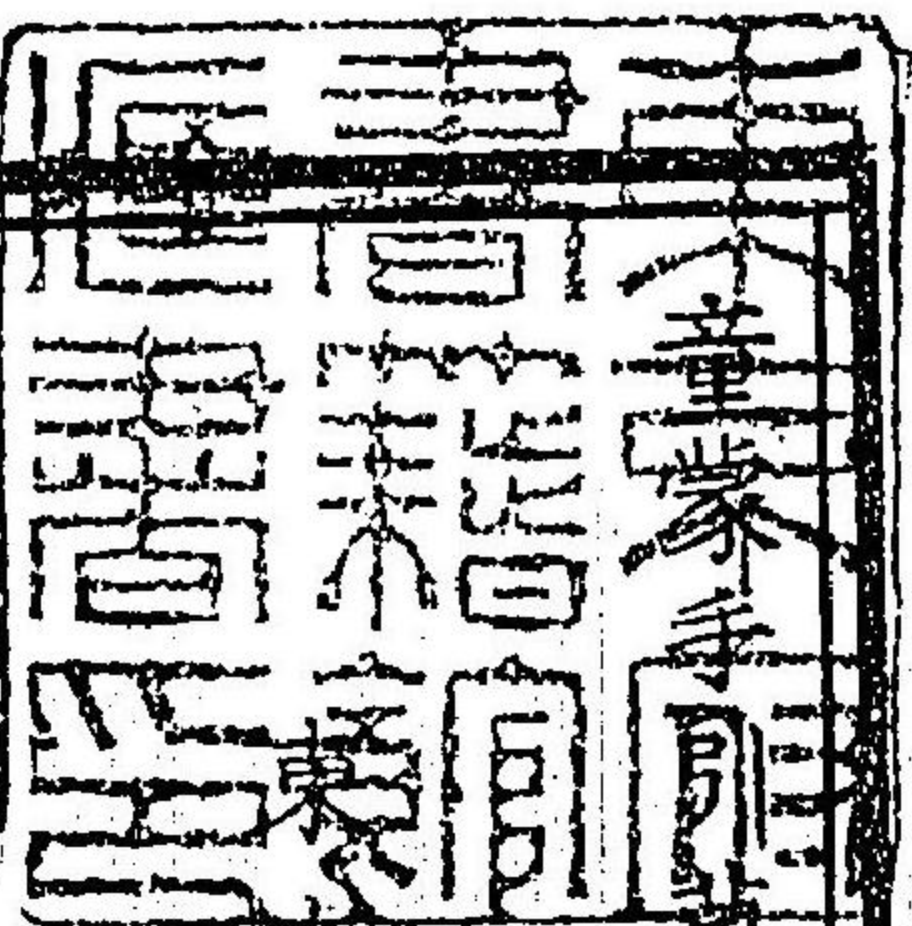
書籍の事 活版ノ事

冬の事

雨の事

氷の村

童蒙手引草卷之一目次



童蒙手引草卷之一

○ボウカンソンの事

書籍ハ才智を求る人ハ不足するツキなく常シセンは自然シヨビヤクモクの書籍目  
 前ゼンに在アリて讀ヨクむは足タるへし然シカれとも只タ之ヲを讀ヨクむ而已ノミてハ  
 才智を得る能カえず故ユに万事ヲ能く注意チカして之ヲを熟讀ジュクドク翫味クワンミ  
 する時ハ更ナに知覺チカクを鋭敏エイミンたらしむるヲ至タるへし  
 幼年ヨウネンの時より万物マンブツハ極キョクて注意チカクするヲを習慣シヨクワンせしむべき事

橋爪貫一抄譯



よして常々我を坐右に居る物一として注目すへからざる者なくして今日我々を照しか、やかす處の太陽よりさつき鳴く小虫に至るまで皆悉く之を注意する時ハ開知の一端を得へ

遊歩するに自ら開を覺れず或る職人の其業をふすを見彼の才力を見又彼の爲す處の方法を注目し彼か用る處の器械に至る迄もよく心を配り片ハ我開も反て用られて以て要用の時となす者ふり仮令ハ一つの理を解明なく難き物なりても若し此物の目と觸る、つららハ必ず能く之

を注意すれハ其初めハ利解ふし得ざる者といへとも再三之を熟考し或ハ覺へ得ざる者も尋ね問ふ片て遂に我が疑の氷解するに至るが如く却て之が爲に新規の説をも發明するに至るべし

西洋紀元一千七百年の初め方つて佛國の都府グレノーブルといふ所に一婦人あり幼少なる男子一人を持てり其名をホウカシソンといふ此婦人ハ大に神を信仰するを以て常に日曜日ハ必ず一子を連れて寺に詣り信仰の説話に時日を過せり然れとも此一子ハ更に母の説話に注意せざ



の間にか、リ所の土圭を垣間見之を見る毎に忽ち其理  
 を悟るべき才智を以て深く之を検査し土圭中の緊要なる  
 器械を畫く了を樂し之又一部分の見るべき器械ハ其用ひ  
 方を判断し母と共に寺へ行くと毎に必す之の注意し實  
 幼年の心中よかおて練も憩ふ暇なく晝夜土圭の了心  
 思を止め終る粗なる道具を以て木よて之ガ器械を造り出  
 せし正しく時辰を指すよ至れり之よりして器械學者と  
 なり此前期代チ七百年来を才智よて驚かせし又種々の器械を製  
 作せし事尤も多しと雖凡就中佛國の都府リヲンの糸を製

もる器械よ於てハ大なる發明をなし便利を極多し又此他  
 驚くべき且感ぜべき器械を發明せり之ハ久しく病牀よ臥  
 せしとせらてしガ猶不絶へば勉勵して終る笛を吹く人の  
 像を造れり又二ツの鴛鴦中よ餌を求め且水を動かし樂し  
 む處の景色を彫刻し大に其名を轟かせて

○紙の事

紙ハ教場日用の具よして其色白く甚だ軽く且筆をもちて  
 文字を忘るし久しく保つ様よ堅く美しきを最も善とする  
 事なり然れとも之ハ何を以て製するやを知るもの稀なり



紙ハ市中修道端等

に捨る古き布の

切よて製る物な

て故に西洋よかわり

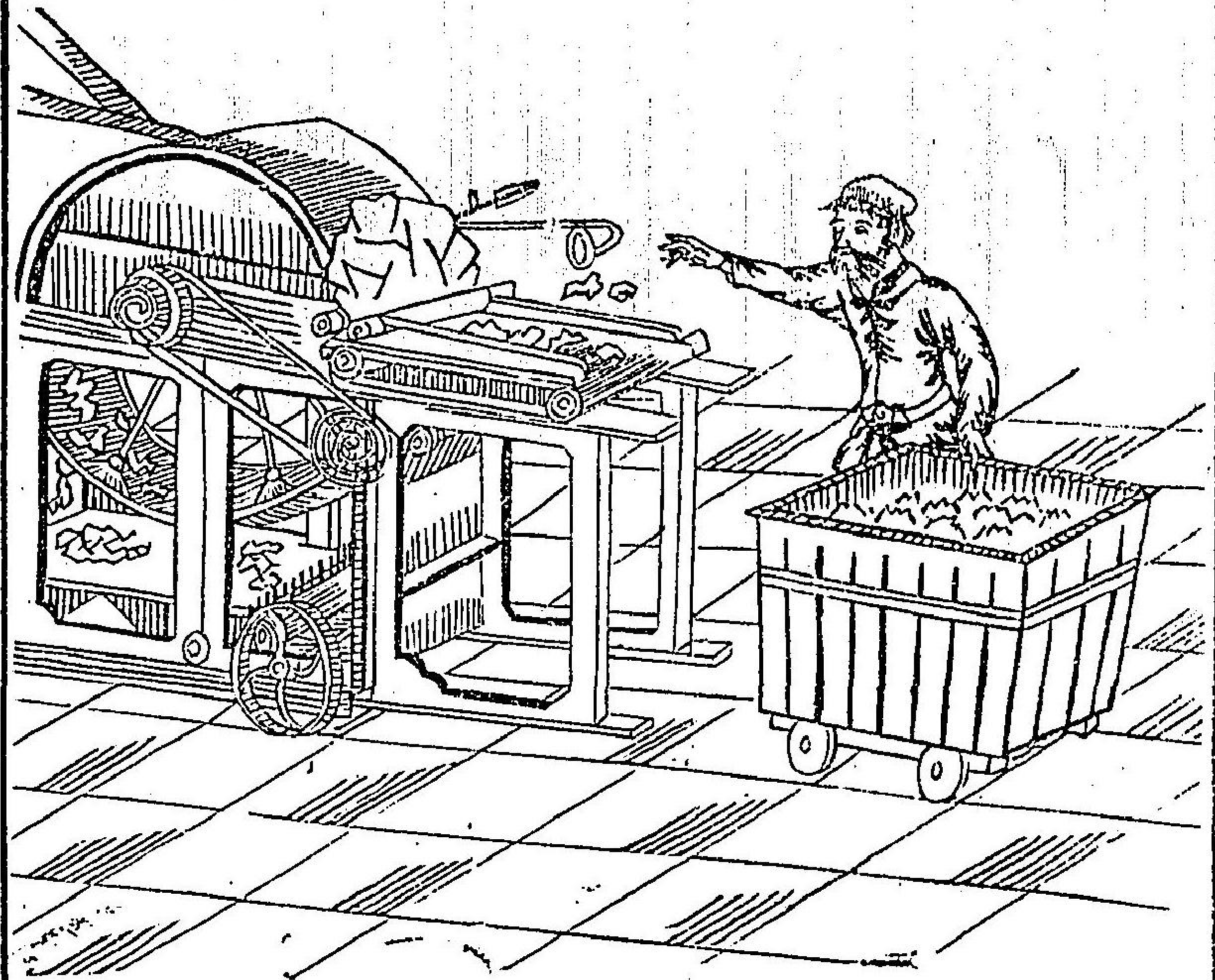
ても常よ之を拾ひ

集るものハ籠を脊

負ハ杖の先に釣を

つけ塵芥の中よあ

る古き布切を拾ひ



ちつめて紙製所へ持ちゆき之を六種よ分ち油をざるゆり

ハ灰汁を以てららひ且つ縫目を解く此方法ハ古き布を蒸

氣らるところの水よ浸し置き水力を以てハ或ハ蒸氣機關

を以て重き金槌を動かハ之を打ち崩もつなり然しながら

當今の製糸法よかゝてハ齒を設る金属の大なる筒と動

かざる木の臺の上よ他の齒を設け筒の齒と此臺の齒を喰

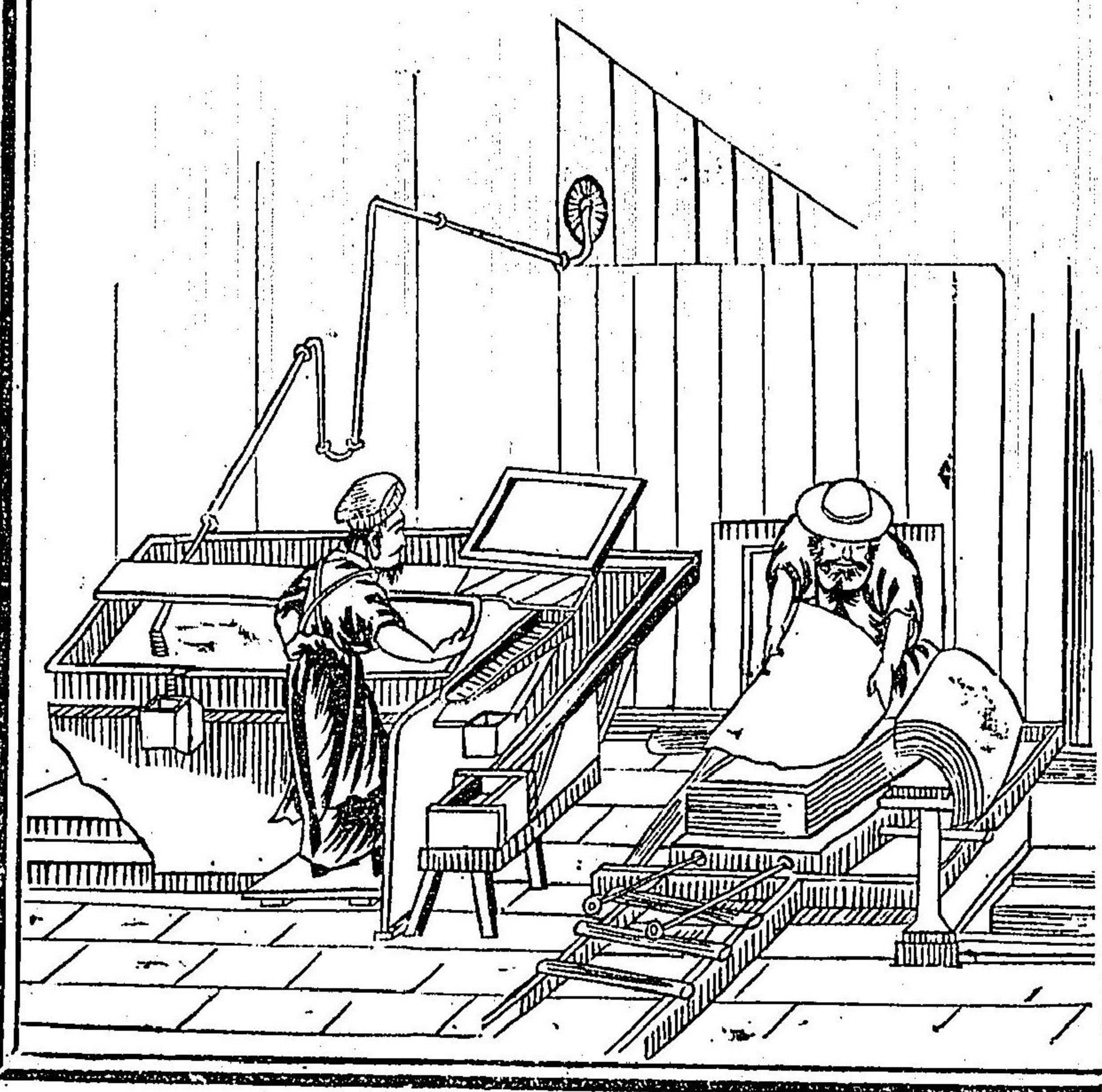
ひ違よ入込むやうよ造り此筒を廻す時も筒を臺との間少

く離る、故よ古き布ハ裂けて糸の如くに出るなり又其

他の器械らてて之よ近づき共よ廻るゆへよ糸にふて古



き布タチヤを忽ち粉コをふ  
 る又此方法を拵ホドコも  
 前に古き布を籠カゴの  
 上に置き水ミヅをま  
 る不フくロール元  
 をかけて古き布を  
 洗アラひて白くなく又  
 粉コをなす後ノチク  
 ロール石灰イシハイの鹽シホを



之を交マぜれシて一時間イチコウカンよりシて鈍シヨク粹スなる白色クハクを化クも  
 木匡モクキヤウへ銅ドウの管カンを以モて蒸氣シヤウキを誘導ミチビきて水ミヅを温度オンドを加ソへおき  
 此中ココへ古き布を以モて製シる粉コを浸シ入ニも  
 又紙シを漉スく籠カゴを以モて之ノハ黄銅レンドウの線センを以モてちを編アみ其下シノへ  
 小コき鉄テツの定木テイキを嵌ハマめるものなり之ノへ又薄ウスき籠カゴを合せ之  
 をふるきぬの、粉コを浸シせし處トコロの木匡モクキヤウの水中スイチュウへ斜ナめ入イて  
 平坦ヘイタンなすくい揚アぐれば水ミヅハ籠カゴの下シタへ流れ出て残ノコり古切  
 の粉コハ全マく紙シとなるふで  
 此手業コノテウガをなすのノチ後次ツギより人ヒトハ之ノを受ウけり漉シめる破ヤブれ安ヤス



き紙ヤウモウを羊毛フリモウの織物アイダの間ハサに狭ハサ之又其上に紙を置き又織物を  
 置き逐次チクヂに斯カクの如スビウヤイく數十枚をかさね其上にかもき物を壓アツ  
 して水をせざるまで此水の能ヨくせれあるを待マちて紙の間は  
 織物を去サり紙をのこ積ツみ重ねて能フタく再アツひ壓アツし風フにちて、  
 よく乾カワカし書籍シヨビヤク或ハ畫エなとを摺スるは用ヨり然シれとも日用キヤウ又供  
 する處の紙ハ墨スミの鈍ニレヤ漆ニレヤまぬ爲ニに糊ノリを引ヒくべきなり  
 此糊ハ明礬メウバンとヂエラチチーヌヌタルタル骨骨ノ間間ヨリヨリ取取リリを混コンし和湯クワトウの  
 中中に紙紙を束ツガね多多く俵ヤに入入れ又之を解トき崩クツし能シメく瀝シメるを  
 待マちて又前法前法のごとく一枚イチヤイづ、羊毛ヤウモウの間ハサへ挟ハサみ上上より壓オ

いかにかして遂ツイに織物より附ケる毛毛をよく去サして五百枚  
 づつづつねるべきなり  
 麻アサの屑クツを以て造り紙ハ極ヒめて美イヘふと雖イヘともふるきぬ  
 のより製スる多ス紙スも少コし和ヤウラかなるのこよて可コなりうつく  
 べき紙を製スするものなり  
 又紙ハ藁樹ワラキの皮カウウフロンフロンノノヲルチヲルチーー麻アサ葵アヒ苧ヒョウ桑サウの木キシ  
 ヤンタンヤンタンノノ草カサノノ名ナヲヲ枯カ草カサ等トウを以て製スし又白楊ハクヤウ栗クリのコ小枝コエダなそ  
 を以て之を製スるも又往昔ムカシハパヒリユスユスと云ふ小木コキを以て  
 紙を製スる多多り故コトに紙紙の事コトを今イマパピエパピエと名付ナふこと、



ふれり

○筆の事

筆ハ鳥の羽根を以て造りしものよて其莖のよにて造りしものハ細くして且つ堅く又羽根のまよてつくし者ハ長くして最も善と也

方今よかわてハ多く羽筆の代りよ金屬よて之を造り用也之ハ佛國の器械學者なるアルヌートといふ者此發明もる處よして重よ銅或ハ黄銅をもつて造り専ら貿易物也

○墨の事

墨ハ樹葉に生もる節カン

ヘーシユテ赤色ヲ添ル物ナリ硫化鉄及び亜刺比亞護膜

の四種の細粉へ繻かの水を加へ沸騰もるをまぢ後

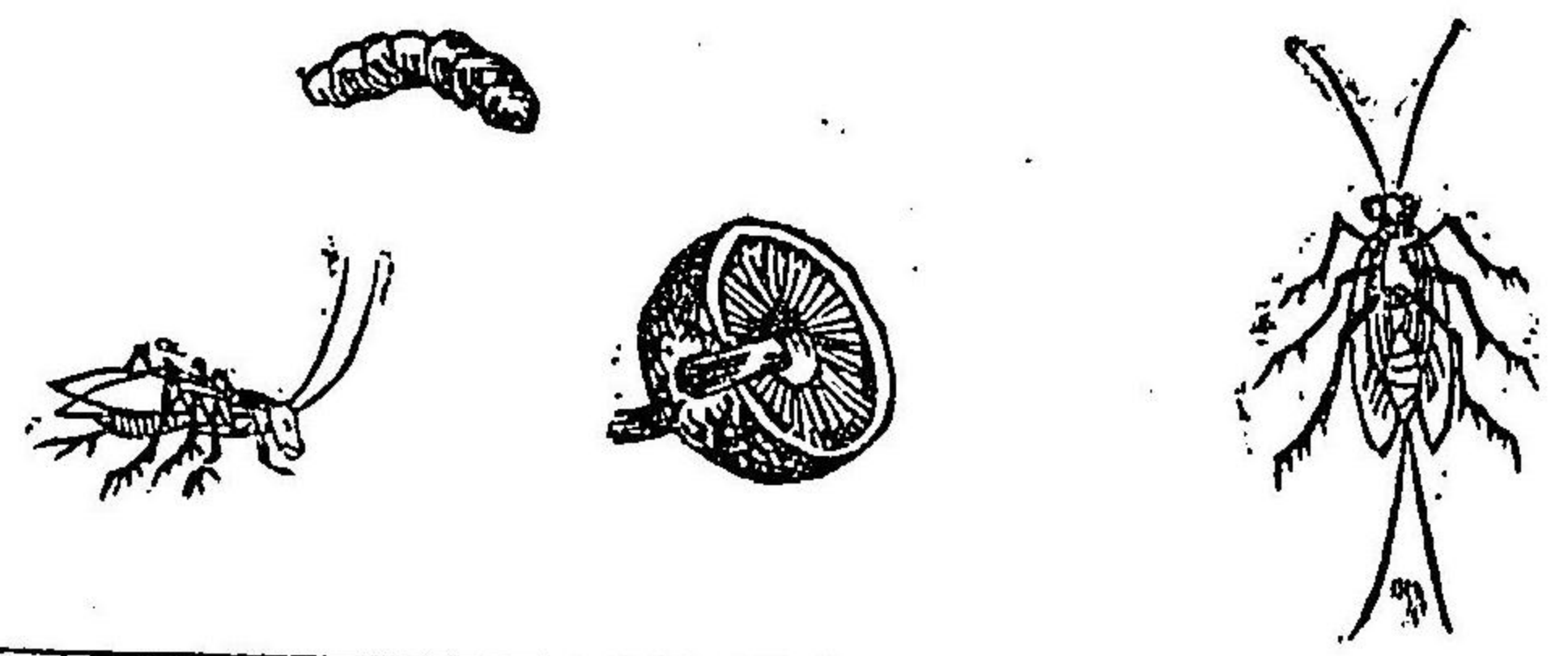
これを澄して玻璃の器中よ貯ふふなり樹葉の節ハ

虫來りて樹の葉よ卵をつけ又ハ葉虫のつくとき其





虫葉を刺して穴をなす此穴終る節の如く  
 よなり爰より水の液を一所に集るなり就  
 中柏葉樹の節ハ黒き漆物に用ひて尤も美  
 なるものなり又小亜細亞中のアレツプよ  
 り來りて斯の如く樹葉に疵を附る虫をシ  
 ニツプと名つけ四ツの羽根らてさふが  
 ら蟻の類なり又此虫の附る葉節ハ團く  
 して其大きき櫻の實の如く其中にタナン  
 といふ液を生じ硫化鉄の上よ能き働きを



いてもつて黒色をなすものなり  
 サンヘーシユにて刺多くアカシヤ  
 よいて香ひ深く亜墨利カアンチール  
 此木を細く切り湯に沸して赤色を染むへ  
 硫化鉄ハ緑色の者なり其味は於てハ堪へ難き物なり土中  
 よりて硫黄を混和し鉄を生せて此鑛を一年の間水に浸  
 置き灰汁をかけ又水氣を蒸發せしむる片ハ貿易に出  
 へき鹽の塊をなすへ  
 護謨ハ杏桃櫻などの木汁空氣よりあつて塊をなすもの



を造て之を製せしものよて歐羅巴は多く生も尤も之  
ハ中品よて並刺比亞或ハ麥西のアカシア名木ノ生むる  
者をもつて尤も上品なりとす又之ハ鈍漆まぬ爲も練か墨  
の中よ加ゆる事ふて

○石筆の事

石筆ハミードブロン又ブロンバシースノ名付し  
事ちれとも之ハ全く非ふり此石筆は於てハ鉛ハ更も用ひ  
て石炭は鉄を練か加へて製し杉の細き棒を割り此中へ溝  
を彫て墨を入れ亞刺比亞護謨をもつて粘着し上部よて

又杉の木の割る者をつけて造るものあり故も必も墨ハ  
皆の中心よちるなり

善きブロンバジルハ英國コンベルランドより多く出  
も然れとも佛人コンテといふもの、發明せし所の石筆ハ  
大造の石筆も劣らざ且つ其堅さよかゝてハ殊も便利を  
ふせり

黒き額面板の上に書く爲の石筆ハ細密なる白堊を能く洗  
ひ且つ乾かして壓をかけ硬固くふりある者よて所々も産  
する石炭の類あり又佛國巴里の近所なるムートンといふ



處より出る白堊ハ美しく且つ多く出ると云ふ

石盤は用ゆる筆ハ石盤に同じ性質の者にして所々多く

生ずるシストハ書留ニ用ルル石なり此尤も貴きものハ

ロ耳曼の都府ニユーランベールより來れり又石盤に記し

る多額色の線ハ少一の瀝りを與へて之を拭ひ取るへ

○石盤の事

石盤ハシストといふ石にて佛國アルタンク郡の都府ニシ

エール又同國セバンヌ山或ハ同國メーヌドロワール郡の

都府アンジエー等より多く出るものにて其始め地中より

掘出せし紙ハ紙の如くは拵やもき者なり又之ハ多く家根

を膏く爲し用ゆるものにて其厚さハ漸く二ミリメートル

位なり此シストにて家根を膏くハ先リポーシユ薄キ板ノ

といふ輕き板を釘を以て家根に打付け其上へ此シストを

置くなり

當時ハ何れの學校よおわても必らず書法或ハ算法及ひ圖

學を學ぶ者ハ之を用ひて紙の儉約ハなせとも反て筆

を持ち悪くなし手は悪き癖をつくるなほへ

○海綿の事



海綿ハ曲リ安クカイン一ニ穴多ク且ツヤコシハなる者アノホにて能ク  
 水を吸ひ込スむコテ誰タレもよく知るステなれども水獸スイヂウ水中ノ  
 造リツクーものなるツハ更タに知る者スあり

海綿ハ希臘ギリシアノ多嶋海中タトウサイチウノ礁イハに附ツきたるをとりツふり又之  
 を水面スイメンより出すステ必カナらざる動ウツく者スあり儲サテ之を取上トる後ハ  
 其粘着物ネリモノを去サり貝カヒらるハ其ノ中ニより所ノ石炭シタンノ如シき者  
 を取トテクロールヲを以テ能ク洗アラひ白ハク色シヨクとなシテ貿易場ボウエキバに運  
 送ソウすル事ナリ

○黒色額面板の事

之ハ教場キョウジョウにて用ヨひル黒クロく塗ヌたス板イタにて搬ヘン或ハ柏樹ハクジツを以テ  
 造ツクるハ一ト志シかシ其ノ尤モも能キ者スハ板イタノ小コ板イタを多シくシぎ合アせ  
 て造ツクりラうラうラにて解トゆるス石イシ煤カイにて黒クロくぬルりノ物モノなり  
 アンジエアンジエノ石イシ切キ場バにて黒クロき額ガク面メン板バンノ代カりニ用ヨひル大ダイ石シキハ  
 尤モ便利ベンリよりシき物モノなりシ雖イヘドモ其ノ價アタヒ貴キくシて反カヘリて用ヨひル難カタ  
 しくモ

○筆切小刀の事

筆切小刀フデキリコガタナハ之ヲを抵エとス又ハ之ノ二部ニブに分ワち其ノ柄カハ木キ或ハ角カクを  
 以テ造ツクるハ又ハ注チウ意イして全ク鋼鉄コウテツを以テ造ツクるハ



鉄ハ自然鈍粹なる者を得るハ甚多稀なモ門戸の錠前など  
 造るものハ鉄の鑛より取りし人造の鐵なり又鐵の鑛と  
 云ふ者ハ硫黄又ハ土と混合し赤き鼠色と土の色を添ふ  
 且つ此重くろるハ鑛の多き證なり又此交り物を去り鈍鐵  
 をとりて鐵の形をなすハ大なる爐の下に火を直に置き  
 其上より石灰を入れ下よりハ風を入れて火勢を強くし  
 其下箱を入れ置て溶解し多所鐵を入る、其ハ其鈍  
 粹なるものハ重きが故に箱の底に沈み交混物ハ其性輕き  
 を以て上は浮遊し二物鐵の箱の中は充分満るときハ箱の

下端の穴より鈍粹なる鉄ハ砂の上掘り溝の中へ流れ出  
 て爰に塊をなす之を鑄鐵と名付く又再び之を溶解せしめ  
 鑛の中は流して烟筒釜或ハ階の欄干等を鑄造し然れども  
 之等ハ鈍粹鐵の代用をふさむ故に又再び之を爐の中は於  
 て溶解するハ鉄ハ甘場の中は集りて眞の鈍鐵を造るへ  
 し又之を大なる槌にて鍛て棒とふし始めて貿易に用るなり  
 鋼鉄ハ粉よりある鉄を木灰の上は置き練化石の櫃の中は  
 入れ能く口を閉塞し之が爲に造る爐中は投し置くハ  
 鋼鉄を得へし又之を水に投するハ反て破れ安く鉄と合



せざれば用ひ難きに至るものふせゆへは庖丁杯の類ハ鋼  
キリメを極ウスて薄く鍛へ又鉄を同く薄く鍛へ鋼を中心とく左右  
よて鉄を合せて一枚の板とふてつくる故に破安き處の  
鋼といへとも鉄の間は狭ハサミあるを以て更ワレに損クもるゝかゝ然  
れども筆切小刀の如きハ鋼のこよてつくと又タンギンに彈金を附  
もへき溝或ハ蝶番テウツガヒよて折オリて柄の中エに納むる様ニ造る又之  
を剛トにハ薄き石を用ひらるひハ石盤セキバンを用ゆるも可ふ也

○書籍の事

往昔ハ書籍ムカシ甚ハ多ハナ稀ヤレふるがゆへは従つて其價シタガも貴ソノアタヘく已タツトま

今を去る五百年前ハ板行ハンコウするヲを知らセも只シヤホンに寫本師のこ  
ふるが故ニ多クくの時間を費ソイヤをも以て高價カウカとなり一書籍の  
價アメを以て一地所イツトシヨを講求モトムもるニ至る當今シヨに至りてハ種々の  
事キサイを記載キサイせし書籍シヨビヤクと雖レンカ凡廉價を以て求むるニ至る  
往昔ムカシハ書籍の少シヨビヤクきのニふらむ人民ヨムも讀むヲを知らセもて  
不學フガクの者のニなりテなれども當今シヨに至るニハ書籍シウブン充分ベシな  
なりトよて既ステに市在シサイの人民ベシも各々書籍ベシを求めて之を勉勵ベシ  
もるニ至れり

昔ムカシ佛國第五世の王シヤルムカシの時一千三百六十四年即位ス始め



て文庫を設けて書籍をらつめありて此王の死せし時  
於て漸く九百冊のとなり然るは方今も臻りてハ六十万冊  
の書を藏せし云ふ

紀元一千四百四十年日耳曼の都府マイヤンスに於て板行  
を發明し次て日耳曼の都府ハルラン及び佛國の都ストラ  
スプーブルに於て又之を發明し競て書籍を公行せし其發明  
者ある者ハコヒヤンス人ギユツタンベール及び同國の金  
銀匠ホースト等なるとされとも此術の最も速かなるを以て  
衆反て魔術なるやとの疑念を發せし

其始ハ木又ハ鑛へ文字を彫刻して摺あるべきなれどもコヒヤ  
ンスの金銀匠ホーストの童奴ピエールスクツヘートなる  
者溶解鑛を以て活字板を製するを發明せり之ハ鋼の彫  
物小刀を以て銅の小片に文字を彫下し之を鉄の鎔の中  
入れ鉛とアンチモニーの十分の一を加へて小匙にてつき  
込め又空氣を抜く爲め少く鎔を動揺る之ハ鉛を此の中  
に充分に入れて文字を鮮明に鑄出せしめんが爲なり又此  
鎔ハ鉄を以て造り之を取扱ふ際に當りて尤も便利の宜  
きが爲に木柄を附しあり



活版ハ詞を造る爲に文字をちつめ而して後之を摺るナ  
 リ故に詞をちつむ職人と之を摺る職人とを要するナ  
 然れども三十年以前より蒸氣器械を以て之を摺るナを  
 發明せし由て大に人力を省き且つ美をなせり  
 文字をちつむ職人ハ之をちつめて詞を形造り其間へ鉛  
 の切を填めて一詞間の隔をなく其詞の多くらつまり後  
 ハ又職夫ちつめて紙の大小に随つて之を篋に入れ且つ之を  
 紙の表裏に區別し其誤謬を検査し之を校正者に送る  
 校正者ハ文字の集り方の誤を吟味し若し誤りられバ之を



紙端に記し又  
 之を著述者  
 熟讀せしめ又  
 再び校正者之  
 を讀みて遂に  
 誤謬なきナを  
 考るして而し  
 て初て紙の片  
 面を摺る又此



墨ハ麻油マユと烟煤ススとを以て製リ糊ミツ及ハ蜜ミツの如き砂糖サトウの塊クり  
 を以て造り多ク圓筒形エントウケイは器械キを以て墨を塗ルるトなり又前  
 の方法ホウホウの如く誤謬アヤマリを正スして後紙ノチの他面ホノオモを摺ルり其後カキトキ又反綴マエ  
 師シ之ノを送りて能く乾カかク集アツりて綴トキアゲ上ルるトなり然れモ  
 當今トウキミの如く器械キを以て摺ルるトハ紙シの表裏ヘウリを一齊イツセイに摺ルるト  
 なり

紙シを折マり或ハ綴ト或ハ反表紙オモテシを附ルるト等トウハ多ク婦女子フジョシの  
 預アツカる處トコロなり然れモ本綴ホントキに製ルるトハ板行ハンコウをすりある時  
 の文字モンジの跡アトを消失セウシツせシむル為ニ墨シを乾カかク能く研磨ケンマする

石の上イシノウヘに之ノを置キて金槌カナアチを以て十分ジュンブに打ち又順次ジュンシを調シへ  
 てと集アツり表紙オモテシを附ケ其上ノに能ク糊ミツを以て脊セを疋シカと接セツキヤク着ス  
 紙シの端ハシを切ツて其ノ口クチハ金キン或ハ種々シツシツの色イロに染メりて以て  
 形ケイ様ヤウをなシて又表紙オモテシハ羊牘ヒツジコウシ等トウの革カバ或ハ色紙イロシをもつて製ル適テキ  
 宜ギ外方クワイハウへ出スるトす

○冬の事

天アメハ萬物マンブツを人ヒトに與アタふるト公平コウヘイにして極ゴク嚴キビき寒サムさ或ハ極ゴク  
 苦クルシむヘき熱アツサ堪タへ難カタき國クニも季候キコウのハるレなる代カワりニ自ミツカ  
 ら一つイツツの牽利カウリを與アタふるものハ也



シユエートの北キクに當れるラホニーといふ國ハ一年の間ホド於て九ヶ月程ハ更ユキの絶タユるレナリ此國にケモノらつてハレン  
又北國ニ生シ其形ハ鹿ノ如ク足ノ爪厚クシテ中といふ獸ケモノらして雪  
又廣キが故ニ車ヲヒキテ能ク氷上ヲ走ル獸ナリといふ獸ケモノらして雪  
と冰の中をも厭イトて其圭の雪車を引ソノシユき遠路を速エシロよてスミヤカれ  
て此獸ハ實シツニ行儀正ギマウキダしく且つ其乳汁を以てハ人の食物を  
造り其皮ハ衣服カソニ充イフクて其食節アテよて常に雪シヨクセツニ蓋オホハれ多ヨク苔  
を掘ナリクて食ナリクと知覺ナリク尤もよくして善ヨき驢馬ロバよても要ヨク用ナる  
ものふて

又亞刺伯ハ迴歸線アラビニ近クワイキセンき國よて其タらつさ堪ガクへ難ガクき國ナリなり

此國ラクハ駱駝ダといふ獸ケモノらして其熱アツさ甚サしき沙漠サバク中を久ヒキく  
アイダき間水ノを吞カッと渴シを凌シくオモてニナく重クきを荷クふて往返クを尤オモも此  
獸ハ餌袋エフクロの中タモに多クくの氷タモを保タモつを以て水氣サバクもふき沙漠サバク中  
を數日の間走ハシるレヲを得ルるレ堪タゆるレヲふて之れ皆クワコウな化工クワコウの  
賦フ與ヨせらるゝ幸利フなるヘい

又此他鳥獸草木タテウギウサウツクの類ルイニ至ルるレまで親オヤの子コを愛アイするレガ如クく全  
く順序シユンシヨを立て保愛シするレも實シツニ化工クワコウの通力ツウリキの能ナくナり得ルる  
處トコロの者モノよして誠マコトニ感カンをヘて殊コトニ小チさき花ハ或ハハ葉ハも一つヒトツの  
蒼ツボミの中ナカにサらりて寒サムさをハるレのニハルニ春ハルの暖氣ダンキを待マつて成長セイチヤウ開ヒラ



き發ハツゆる者なで故ナも若ニし之を氷ヒタに浸ヒも片タキハ忽チち枯カるへ  
然シれズも皆ナ尤モ能ク水ミヅを通スさ、る漆ウルシよて塗マり、覆オホヒり  
或ハ厚カソき草カサの類ルちて能ク細ホソき葉ハ及ヒ細ホソかき花ハナ房フサを覆フへ  
り又ソノ其ホミ蒼カダチの形カタチも上ウハ殊トガ々ヤ尖トり下シハ圓マロく全ケく家カ根ネの形カタチを  
なして自ラら雨アメを爰コ止トめず冰フセを防フき寒サムさをも厭イトて、さる幸サイ  
ひを得テ満足マンジツを得ルふて  
寒サムも堪ヘへ、さる獸ケモノ類ルも於テハ地チ中ナカニ穴アナを掘コりて住ス家カとなシ  
繩ツツかの口クチをもなさも全ケく死シもるが如ク且ツ穴アナの中ナカニ足タら  
さる食物シヨクモツを求ムる力チカラもなく深コく寐ネて冬フユをもこし地チの暖ダン氣キ

を生シもるの時トキを待マツて始ハジて巢ソウ穴ケツを出デて己オンレのももらきをなも  
ものふて  
昔ムカ話ハナシは蟻アリハ先マきの口クチを見ミ通スし節セツ儉ケンよして冬フユの間マハ草クサ木キ  
の屑クツを積ツミ蓄タケへて巢ソウを作ツクて爰コニ玉タマ子ゴを産ウて極キョク寒カンに至ツりてハ  
遂ツヒニ死シずるものとすれども全ケく然シらず寒サムも觸フルれ、猶ナ不フ地チ  
は深コく堀ホリて寒サムさをこのき得ルるなて

○雨の事

密ク閉コメる屋ヤ部ブの中ナカニ火ヒ爐ロの上ウへ壺ツボニ水ミヅを満ミて置キく、鼠ネズミ  
色イロの蒸シ氣キ立ツ登ノボるへ、又マタ此コノ壺ツボの中ナカニ水ミヅ沸フ騰トウもる、片タハ倍ツ々ツ蒸シ



氣を増マし頂ヤカて全く部屋の中中に満ツつへし又猶不火をツヨ疆ツヨくす  
るクハ壺ツボのちらゆる水ハ皆皆な蒸氣となりて終カり枯カれつく  
すへし

然れども此蒸氣ハ皆皆な壁石鏡其他カベ、イシ、シヨウの金具及カナグひ窓マドの硝子等  
へつくものふり此諸物の中中に於コトても殊コトハ硝子ハ蒸氣を冷ヒヤ  
すの性性ちるを以以て爰爰は蒸氣の觸触るクハ之之が爲爲ハ硝子ハ曇クモ  
りを生セウし又細コマかき滴シタりをふし其滴り終アツマり集集りて硝子の上  
に小川コカハの形カタチをふして流流る之れ熱キツハ水水を蒸氣に變ヘンじ寒サムハ蒸  
氣を水水に變変するの元因ケインハ依ヨればふり又部屋の中中の諸部シヨブ分分

は觸フルる、所の蒸氣を残りアツムふく集集るクハ火火はかけし水水と同  
量リヤウをふしものなを

今此部屋を天地間カンコとして考考ふるクハ火の上の壺コウキ中の水水ハ  
太陽タイヤウは熱氣ネツキを受けし大洋ダイヤウなるへし又蒸氣ハ雲クモふり窓マドの硝  
子ドロに流流る、水ハ即スナハち地球チキウ上の大小川ダイセウセンなるへし  
總スヘて季候キコウといふものハ高ノボく登登れハ登登るニ従シタガつて寒サムき事事を  
知知るへし故モトは最モトも高高き山の頂上テウジヤウハ常常に雪雪と氷氷に蓋オホしてゐる、  
者者よて之れ等等ハ地理書ヨツに依依ても能能く知知り得得へき事なり  
モンブランモンブラン白白キ山山トハ歐羅巴オウロバ中の最最も高山高山よて海海の水平スイヘイよ



四千八百十メートルの高さにて常夏に至りても其頂  
 上ハ雪シヤウ、ユキ蓋オホてれ多ふを以てかく名付サンキヤクり又此山脚オホより  
 つてハ窒息チツソクをへき程ホドは熱氣甚くと雖凡山オホに登るに従つて  
 熱氣を減ゲン倍々マス登る片ハ草木生せず氷ハ鏡面の如く輝カンヤき  
 數百年前の雪ハ非常は積重なれど  
 海水ハ太陽の熱チツよよつて蒸氣クワ化して空中クウキウのり高き  
 に至りて始めて寒を受け倍々集りて大且つ美ウツクき塊クワイを  
 なく種々の形状クイゼウなす之を雲と云ふ  
 や亦て風よて平均ヘイケンして空中クウキウは保タモち此雲も全く寒さを受

此ハ水も化し且つ雨となりて落つ又此雲も高山の頂上  
 止トメれハ雪も化して以て冰山ヘウサンをなすへり又此雪も此雨も終  
 り泉イナミの源ミナセとなり小川或ハ大川をなして元モトの海中ウミに流れ入  
 る然る片ハ再び太陽の熱を受て以て蒸氣ハツも發ハツり同ハクじ衛ハクき  
 をなす地球チキウと太陽のちらん限りハ此變化コノヘンクワの絶タユるハ決ケツ  
 してちらさるへり  
 西風ニシカゼと南風ミナミの吹く片ハ必ず雨降り又北風キタと東風ヒガシの吹く片  
 ハ美ウツクくいき天氣となるの道理ハ尤も解トき明アカく安ヤスきなり  
 儲サテ之コれを知るは其初トウサイナンホクめ東西南北の四つの語を知るを



要すへ先つ毎朝太陽ハ天の一方より起て毎夕他の一方  
 没するて其太陽の起る方を東東といひ其没る方を  
 西西と云ふ爰其東を右よりて我人とも立片ハ其前面  
 を北北といひ其後面を南南といひ此四方をホワソナルチ  
 ナウ根元といふなで

佛國ハ西と南ハ海ノ境サカハ常ニ此方より來る風ハ海上  
 蒸發せし所の雲と雨とを誘ひ來るなり又東方の境ハ陸  
 連りて此方より來る風ハ甚た乾けり又北風ハ甚多寒きも  
 のなる故ニ固モトより乾くへきなり且つ又北と東の風ハ雲を

送らさるものふや

佛國にてハ常ニ西風ハ雨を降らし東風ハ乾き多る天氣を  
 なせり然れとも支那ハ之れニ反して東風ハ雨を降らし西  
 風ハ美しく快き天氣をなせり

常ニ太陽の昇る頃ニ當テ鷄北を向き又ハ東を向きて時辰  
 を奏する片ハ天氣なるてを知る又西らるひハ南を向きて  
 鳴く片ハ之れ雨降るてを告ると老るへ此占も多くハ當  
 りて誤るてハ甚多稀なり

○氷の村



雪ハ佛國の温度オンドにてハ一年の間ハ三度降りて直ちハ消キへ  
 専ら耕作を助る者モツハカウサクなタスクて其故何そヤ麥ムギの新芽の雪オホハハれ  
 て寒氣を受るハ只雪の寒さタケのこよて其害ガイも更イなナいと雖  
 凡雪の降らざレて直ちに季候の寒さキコウを麥ムギに受るキハ忽タチち  
 枯カる、者モノなり故に我國ワカクニに於ても雪ハ豊年ホウチンの兆チウなナざい  
 ぶて喜ヨロコひコちへり又之れハ反ハてレちる國クニに於てハ此雪の爲  
 に不幸フコクなナぶ有様アツハを顯アせり  
 此國コノクニよりつてハ雪ハ八月ヤキより降り始アり翌年ヨクチンの六月迄キ至  
 り漸ヤウキく五六兩月の間マのこならでハ太陽タイヤウを視ミることを得エる

唯常タハ夜のこよて地ハ氷オホハ蓋フタてれ爰コケハ生ナもる草木ワカメの若芽  
 ハ忽タチちニ枯カれ此寒タケさニ堪タる草クサも唯苔コケのこナり又海濱カイヒンハ於  
 てハ氷オホリ柱ハシラの如ニく立タて海面オホを覆フひ海ウミハ山ヤマの如ニく重カサナり青色セイシヨク  
 を透スき通トウし尤トウも美ケレキし景色ケシキを極キめルと又爰コケハ時々北光ホククワウと  
 いふて非常ヒジョウの光ヒカりを放ハナつ事コトあり之れハ一年中太陽ミを視ミる  
 國クニよてハ決ケツしてなきコトよて唯太陽タを視ミさる國クニのこ此光ヒカり  
 を以て照テラもといふ之れ實ジツハ化工クワコウの妙用ミウヨウなり  
 此國コノクニハ任キヨビツする所トコロの人民ワカカハ甚シ多カ綿ワタよリて且ナつ異風イフウなり昔ムカ  
 一英吉利イギリス人の此國コノクニハ往ユきトキ時トキもエスキモヒ北亞キタヤ盛シカ烈リョウ如ニ列リロア



ラドイアナリ人 ハ 緯の人数 ナ ヲテ男女幼老及ひ荷犬とも合せて  
 七十の活物 ク を見ると又之れ等ハ氷の家 マ 満足なる有様  
 きて居住 キ せし此氷の家 カ を造るハ氷を石の如き形 カ 切り  
 之れを石の代り カ にも壁の代り カ にも用ゐる カ たり儲之れを  
 組立 ク るハ石の如く切り カ なる氷の間 カ へ雪を填て築 キ 立る  
 片 カ 又ハ北風 カ きて氷の間 カ の雪 カ ハ悉く解けて一枚 カ の壁の如く  
 となり寒 カ き北風 カ をも能く防 カ き得る カ 至る カ たり  
 エスキマ カ ーの人種 カ ハ甚 カ 多見 カ 悪 カ き風俗 カ によりて脊 カ ハ歐羅巴人  
 より低 カ く面 カ ハ圓 カ く カ して眼 カ 少 カ く且 カ つ顔 カ 色 カ 黒 カ く鼻 カ ハ頬 カ よりも

卑 カ く手足 カ ハ甚 カ 多短 カ く衣服 カ ハ水牛 カ の皮 カ をもつて製 カ 一  
 チヨツキツ カ ボン カ も平常 カ の者 カ より長 カ く カ 暖 カ か カ によりて更 カ 一  
 寒 カ さ カ 多 カ 恐 カ る様 カ な カ 又 カ 此 カ 人民 カ ハ常 カ 多 カ 面 カ 部 カ 及 カ ひ手足 カ 魚 カ の  
 脂 カ を塗 カ る カ へ カ 一 カ 般 カ 汚 カ 穢 カ きて其風俗 カ 尤 カ も粗 カ なり  
 此 カ 人民 カ ハ何 カ れ カ も不 カ 學 カ によりて地球 カ 上 カ に於 カ てハ外 カ 人 カ なき カ 一  
 の様 カ に思 カ へ誇 カ り カ 又 カ 鉄 カ を用 カ る カ 一 カ を知 カ して小 カ 刀 カ の如 カ き カ もの カ を  
 造 カ りて諸 カ 用 カ に當 カ ぶ  
 アル カ プ山 カ 及 カ ひ亞 カ 墨 カ 利 カ 加 カ に於 カ てハ赤 カ き雪 カ の降 カ る カ 一 カ ち  
 其 カ 初 カ め カ ハ活 カ 物 カ な カ の交 カ り カ なる カ へ カ 一 カ と カ 言 カ ひ カ 一 カ 近 カ 時



タケルイ  
茸類の交りて降るアキラなるを明かに知れシ也

童蒙手引草卷一終

童蒙手引草卷一  
一  
二  
三  
四  
五



